

行って実を結び、
その実が残るようにと

ヨハネ 15 : 12 - 17



司祭 ヨハネ 井田 泉

2020年11月30日

ウイリアムス神学館関係逝去者記念聖餐式

京都教区主教座聖堂（聖アグネス教会）

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようと、わたしがあなたがたを任命したのである。」ヨハネ 15:16

最後の食卓の席で、イエスは弟子たちのこのように言われました。

「わたしがあなたがたを選んだ。」

イエスはどういう思いで、どういう表情でこれを弟子たちに言われたのでしょうか。弟子たちはどういう思いでこれを聞き、受けとめたのでしょうか。ついさっきイエスの手は弟子たちの足に触れました。弟子たちは自分の汚れた足をイエスに洗っていただいた。その手のぬくもりと力が弟子たちの足と体に残っています。イエスの愛と決意が、弟子たちの心に宿っています。

「あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように」

イエスはこれからの弟子たちの働きと苦労を思いつつ、祈り励まされたのでした。

今から 168 年前、1852 年の秋、ひとりの若者がヴァージニア神学校に入学しました。チャニング・ムーア・ウィリアムズ、当時 23 歳でした。3 年後、卒業を前に彼はアメリカ聖公会内外伝道局外国委員会に対してこんな趣旨の手紙を出しました。

「中国伝道に自分の身を献げたいのです。よく考え、聖霊の導きを求めて祈ってきた上での決意です。」

ウィリアムズは中国での働きを開始した後、しばらくして日本への宣教師として指名され、幕末の 1859 年に長崎に上陸しました。そして 1908 年に満 78 歳で日本を離れるまで、50 年近くにわたって日本で活動し、日本聖公会の基礎を築いたのでした。

彼の伝記を読むと、いろいろな逸話が記されています。

当時、鉄道の客車は一等、二等、三等の三つに分かれていた。三等車は背もたれも腰掛けも板張りで、長く乗ると体中が痛くなる。それで宣教師は皆、二等に乗っていた。あるとき、ウィリアムズ監督（主教）を迎えるため、信徒が駅のホームの二等車の停車位置で待っていたが、いつまで経っても主教が降りて来ない。どうしたのかと心配していると向こうのほうから監督が歩いてきた「どうして監督さんは三等に乗るのか」と尋ねると、「四等がないので仕方ありません」と答えたそうです。

東京の聖三一神学校では、ある神学生から部屋の不満を聞いて自分の寝室と学生の部屋を取り替えるということがあったそうです。その神学生というのは、後に大阪教区初代主教となった方です。

ところでわたしたちは聖公会の人間として祈祷書を中心に礼拝生活をしているのですが、最初の日本聖公会祈祷書の元になったもの——少なくともその一部は、ウィリアムズ主教が英語から訳して編集したものと聞きます。『朝晩祷文附リタニー』（1878 以前）がそれですが、ウィリアムズ神学館にも保存されているかもしれません。

日本聖公会の最初の主教・元田作之進はウィリアムズ主教をこのように追憶しています。

「監督は説教を準備せらるゝ時は、一室に閉ぢ籠つて内錠を下し、普通の来客には面会せられず、草稿は例の用紙に細字に記載し、毎週二回の説教を欠かさず準備された。」

「監督を知るものゝ、恐らく生涯忘るゝことの出来ぬのは、あの靈氣に溢れ力に満ちた祈禱であらう。師が ^{うやうや} 恭しく跪き両手を組み合せ、天を仰いだ、いかにも、神を愛する子供らしい態度、一言一句静かに厳かに肺肝より湧き出で、而かも

信任に満ちみち、^{あたたか} 恰も五六歳の子供が、親に甘へるやうな語調、ゆかしとは云はんか、崇高とは云はんか、^も 若し神と親しく物語る祈禱ありとせば、^{これ} 是ぞ確かにそれであると思はれた。監督が祈禱書を用ひて祈らるときも、其態度といひ其語声といひ、^{とて} 逆も之を祈禱書によりて、祈らるゝとは思われなかつた。」

あるとき、奥野昌綱というウィリアムズよりも五、六歳年上のプロテスタントの牧師が訪ねてきました。聖書翻訳や讚美歌編集に貢献した有力な人です。話がたまたま祈禱書に及んだとき、奥野はウィリアムズに向かってこう言いました。「祈禱書によって祈禱するのは形式的で誠実さを欠く」と。ウィリアムズはそうではないと答えたが、相手は納得しません。しばらくしてウィリアムズは祈りましょうと言ってひざまずき、祈りをささげました。後で奥野牧師が「監督さん、ただ今のあなたのお祈りには実に感じ入りました。わたしはこれまでこんな靈的な祈りを聞いたことがない」と言うと、ウィリアムズが答えて「これがあなたのお嫌いな祈禱書の祈りです」と言った。奥野牧師はそれ以来、聖公会の祈禱書を座右に備えて、公私の祈りの模範としたそうです。

ウィリアムス主教は晩年、京都の聖ヨハネ教会で最後の働きをしました。そこには若い日本人伝道師がいてたびたび一緒に礼拝しました。何度かウィリアムスはその伝道師に対して、「あなたの聖書朗読、祈祷書の読み方はあまりに速い」と注意しました。その読み方には耐えられない。「聖書は味わいながら読むのであり、祈祷書は読むのではなく祈るのです」と教えたのです。これは百年以上前のことですが、今日に生かされているでしょうか。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。」ヨハネ 15:16

おそらくウィリアムズは生涯に何度か、この言葉を聞きなおし、この言葉にすがったに違いありません。偉大な人として尊敬を受けてきたウィリアムズですが、彼もまた人間であって、さまざまな葛藤や困難に苦しみぬいたに違いないのです。日本聖公会の組織創立（1887）にあたっては、アメリカ聖公会と英国教会の合わせて三つの宣教団体の対立を調整し、また宣教師

と日本人信徒の葛藤に苦勞しました。また諸教会の悩みがありました。あるときは大津の教会（わたしの母教会です）が真っ二つに割れて解決不可能となり、彼が仲裁に出かけなくてはなりませんでした。

イエスが言われます。

「わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、わたしがあなたがたを任命した。」

イエスが主語です。「わたしがあなたがたを選んだ、任命した」。目的語はウィリアムス、そしてひいてはわたしたちです。

「わたしがあなたがたを選んだ、任命した」

「あなたがたが出かけて行って」、「実を結ぶように」、「その実が残るように」——これがイエスの祈りでありイエスの願いです。使命を与えて派遣した弟子たちを、イエスは「ご自分のもの」（ヨハネ 13:1）として愛し支えておられます。イエスがいのちを供給しつづけておられます。あなたがたの働きが空しくならないように。その実りがその時だけではなく後々まで残るように。生きて存在し、働き続けるように。

今日はウィリアムズ主教のことをお話ししました。ウィリアムズをはじめ、今日わたしたちが記念する人々を、イエスが招き選ばれました。イエスが愛し祝福し、その働きを支えられました。

イエスはかつての人々に対してだけではなく、今のわたしたちに対しても言われます。

「わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように、わたしがあなたがたを任命した。」

イエスはこの言葉と祈りによって、わたしたちが記念する方々とわたしたちを結び合わせ、力づけてくださいます。

祈りましょう。

主なる神さま、わたしたちを顧みてください。わたしたちがしばしば、あなたご自身が生きて働いてこられたこと、今も働いてくださることを忘れてしまいます。かつての人々も今のわたしたちも、主イエスの選びの決意と愛の中に支えられていることを教えてください。この伝道の力が弱った時代に、あなたの僕であるわたしたちに新しく聖霊を注いでください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン